

巻頭言

新しい留学生教育の時代を迎えて

石 田 幸 男

平成20年1月に福田首相の施政方針演説で示された留学生30万人計画は、この春に国際化拠点整備事業(グローバル30)の公募が行われ、いよいよ具体的にスタートした。これまで留学生10万人計画というものがあった。この計画は、アジアで最も科学技術が進んでいた日本が、諸外国との相互理解の増進やお互いの教育研究水準の向上、さらに開発途上国の人材育成に資することを目的として始めたものである。平たく言えば、余裕のある日本が、アジアでフレンドリーな関係を築こうと考えた悠長な計画である。しかし、2003年にその目標数が達成されたといっても、これらの留学生は、日本語を学んだのち日本語での授業を受けるのであるから、大学の教育そのものには実質上何の変化もないし、大学の国際化が進んだとも思えない。また、これによって日本人学生の国際感覚が向上した様子もない。

これに対し、今度の留学生30万人計画は、10万人計画の単なる延長ではなく、それとは定性的に全く異なるものである。その重要な柱が、英語による学部教育であるから、これまでのように教室に留学生の数が増えただけというのとは異なる。この計画が生まれた背景には、世界各国の科学技術が発展し、厳しい競争が生まれているという現実がある。すなわち、日本のサバイバルのための計画である。この施策を成功させるためには、30万人という数そのものは重要ではなく、優秀な留学生を集め、彼らと日本人学生が国際舞台で活躍する実力を付け、さらに大学と日本企業が彼らの優秀な頭脳を生かして将来世界をリードし続けるような体制になるかということが重要である。グローバル30への申請にあたり、学内に大きな反対があることも承知している。しかし、少し注意してみれば、世界各国の大学で英語によるコースを増やし、優秀な留学生の獲得にやっきになっていることに気がつくであろう。またGMの破綻からも分かるように、日本企業も50年先にいまの状態にあるという保証はなく、日本人学生にとって、日

本の大学で、日本語で学び、日本の会社に職を見つけ、日本語だけで商売ができるということが不可能な時代がやってくる。そこで生き残る力をつけるためには、留学すれば一番よいのであるが、留学できなくても、名古屋大学で国際的環境の下に学べるならば、将来国際舞台で臆することなく活躍する力がつくであろう。

ここで思い出すのが、明治初期の日本の近代化政策である。私の専門は工学なので、その目でみると、わずか数十年の間に成し遂げた科学技術の進歩には全く驚かされる。イギリスに産業革命が花開いたのは江戸中期であり、ワットの蒸気機関、フルトンの蒸気船、ステューブンスンの蒸気機関車など革新的技術が次々と生まれてきたころ、日本は安藤広重の浮世絵に見られる世界であり、科学技術は全く立ち遅れていたことがわかる。明治時代に入り短時間でその遅れを取り戻すことができた1つの要因は、大量の官費留学生の派遣と優秀な「お雇い外国人」の雇用である。お雇い外国人の数は、ピークの明治6～10年には500人を超えていたようである。日本人なら誰でも Boys, be ambitious! で有名な札幌農学校のクラーク、大森貝塚を発見した東京大学のモース、日本美術の復興に尽くしたフェノロサなど優れた学者の名前を知っているが、このとき非常に多くの外国人が各分野で貢献している。彼らが、行列の前を横切っただけで切りつけてくる遠い東洋の野蛮国へ、なぜ故国での地位を捨てて来たのかは興味がある。また、彼らの英語やドイツ語で行われる講義から貪欲に知識を吸収した当時の学生たちの努力にも頭が下がる。これに比べれば、グローバル30の苦勞など取るに足らない。

この原稿を書いているとき、名古屋大学が13の国際化拠点大学のひとつに選ばれたことを聞いた。100年後、我々の子孫から、あのとき取った施策のおかげで日本が世界一流国としての地位を築くことができたといわれるよう頑張ろうではありませんか。